

古墳時代のフロンティアラインー田向冷水遺跡ー

小保内 裕之（八戸市博物館）

はじめに

19世紀の後半に米国で行われた西部開拓は、白人入植者による先住民のインディアン駆逐の歴史である。このとき定められた“フロンティア”は、開拓地と未開拓地との境界地域を指すと同時に、インディアン掃討最前線を意味した。現在では負のイメージが強い一方で、新分野とか最先端といった意味も付加されているが、フロンティアの本来の意味は国境や辺境である。

本稿では、辺境という意味でフロンティアを用い、古墳文化側の社会と続縄文文化側の社会との交流がどのようなものであったか、日本最北に位置する古墳集落の田向冷水遺跡を通して考えてみたい。

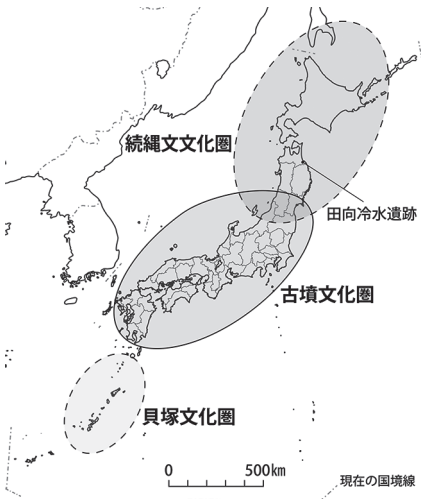


図1 古墳時代の文化圏概念図

1. 田向冷水遺跡とは

(1) 遺跡の位置

青森県南東部に所在する田向冷水遺跡は、現在の海岸線から内陸におよそ4.5kmに位置し、新井田川下流域の左岸、標高8～20mの河岸段丘上に立地する。昭和61年の分布調査で発見されて以降、旧石器（県南初）・縄文・弥生・古墳（県内初）・飛鳥・奈良・平安・安土桃山・江戸までの、各時代の遺構や遺物がみつまっている。これだけの時代幅をもつ遺跡は、八戸市内において他に例がない。



図2 遺跡の位置

(2) 遺跡の年代

古墳時代は、前期・中期・後期に分けるのが一般的である。ただし、実年代については諸説あるため、本稿では土師器と続縄文土器の併行関係を表1のとおりとして話を進めたい。この表に基づいて言えば、田向冷水遺跡の文物は5世紀後葉から6世紀中葉のものであり、集落は約100年弱存続したことになる。

時代	前期	中期	後期
世紀	3世紀後半～4世紀末	4世紀末～5世紀	6世紀
土師器	塩釜式	南小泉式 引田式(佐平林式)	住社式 栗田式
続縄文土器	後北C2-D	北大Ⅰ式	北大Ⅱ式
オホーツク土器	鈴谷式	十和田式	
暦年	250 300	400 500	600

表1 古墳時代の併行関係

(3) 集落の構成要素と特徴

古墳時代の集落は、竪穴建物跡8軒・竪穴遺構3軒・土坑27基・円形周溝1基で構成され、中期後葉から後期中葉にかけて営まれた。これらは、新井田川を眼下に収める標高17m前後の緩斜面に造られ、約70m四方の範囲に分布する(図3)。

① 竪穴建物跡について

一辺6～3m程の竪穴建物跡は、規模に大・中・小が認められ、平面形は整った方形から長方形を呈し、柱穴配置は規模に比例して6・4・2本柱の3種類がある。北から北西壁にかけてカマドが造り付けられ、煙道は無いもの・半地下式で長い又は短いものがある。燃焼部奥壁の一段高いところから階段状に始まる煙道が特徴的であり、4軒で確認されている(図4)。また、南東又は北東隅に貯蔵穴を設けるものが多く、間仕切り溝は半数以上で、出入り口に関するピットは半数の建物で確認されるなど、構造に強い規則性が認められる。

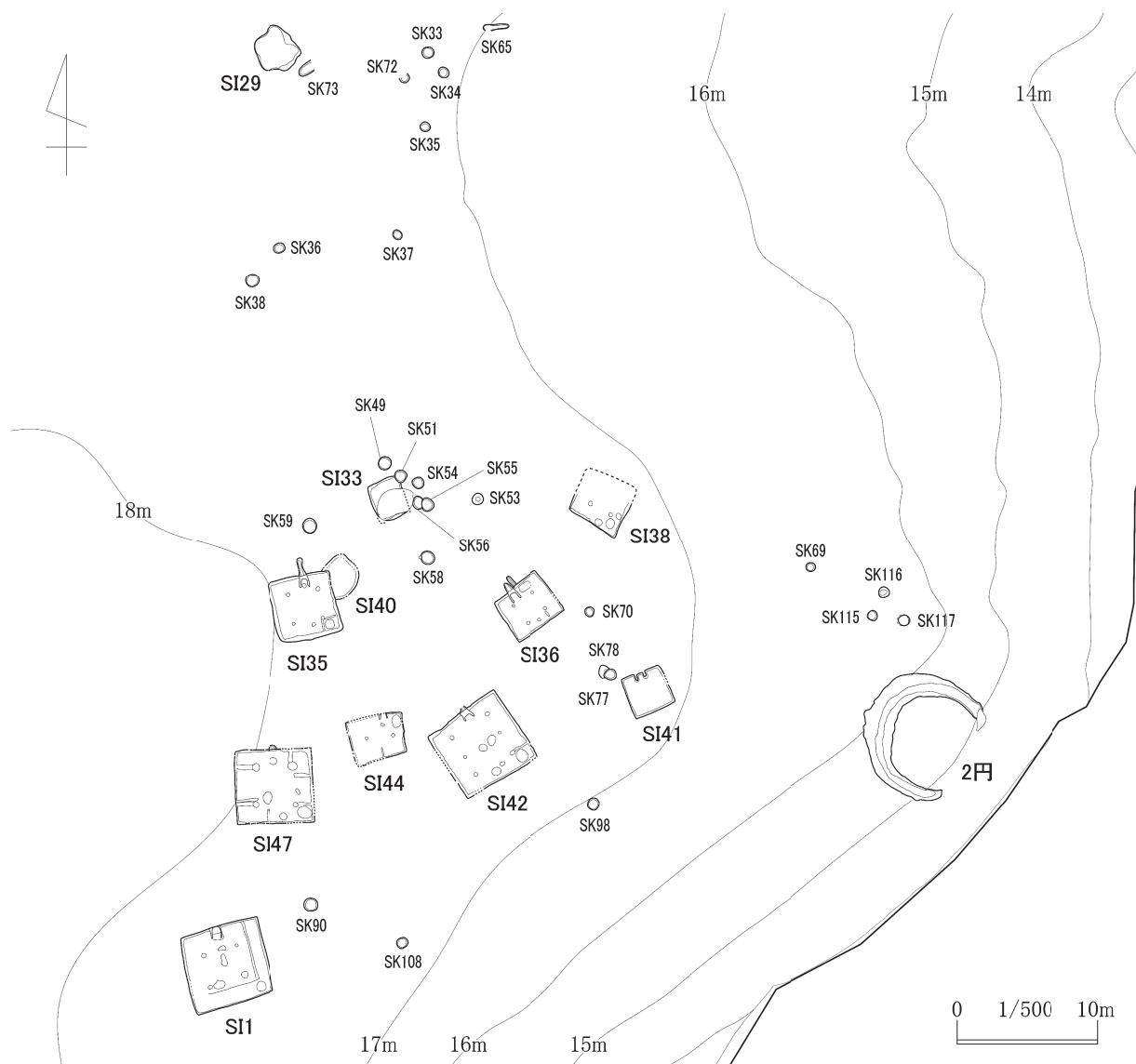


図3 田向冷水遺跡古墳時代集落遺構配置図

これらは、5世紀後葉に4軒前後で始まり、同規模で6世紀初頭を経過後、前葉には1軒のみとなり、中葉には姿を消す。

② 竪穴遺構について

3軒の竪穴遺構（表2の9～11）のうち、SI33は重複や配置状況等からみて、竪穴建物と同時かそれ以前のものであると考えられる。部分的で薄い貼床がされたSI40・29は、本遺跡における貼床の採用が赤穴式期（3世紀前後）の建物に認められることと重複関係から、3世紀以降5世紀末以前のものである可能性が高い。

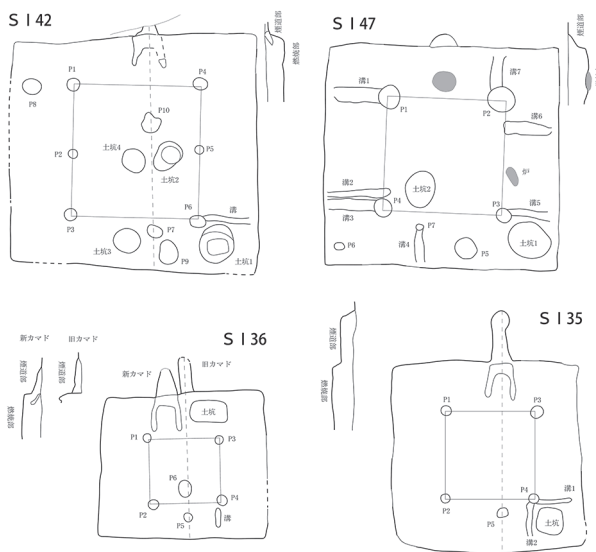


図4 竪穴構造模式図

③ 土坑について

27基検出された土坑は、建物の周辺、北、東の三箇所分布する。多くの土坑に礫が伴い墓であった可能性が高く、詳細は後述する。5世紀後葉のものは少なく、6世紀中葉のものが多い。

④ 円形周溝について

建物跡からやや東に外れた台地の縁辺部、旧河道に向かって傾斜が強くなり始めるところに位置する。削平により遺存状態は悪く埋葬施設は検出されていないが、本来、盛土がされた小型の円墳だったと考えられる。これについても後述する。

番号	時期	規模 ※註1			構 造					出土遺物				
		長×短m	床面積㎡	分類	平面形	カマド	煙道	地床炉	付属施設	土器	鉄製品	石製品	石器	琥珀g
1	SI42	5c後葉	5.97×5.92	28.22	大型	方形	北西壁中央	長半地下	—	貯蔵穴4 間仕切り溝1	土師器、須恵器 坏1・龜1、北大I	不明板状1	剣形石製模造品1 黒曜石15、方割石1、 敲き石1(ほか)	10.16
2	SI47	5c後葉	5.70×5.33	26.36	大型	やや長方形	北壁中央	短半地下	1	貯蔵穴2 間仕切り溝7	土師器、須恵器 高坏1	刀子1 不明棒状1	勾玉1、白玉2、 琥珀玉未製品1 黒曜石13、方割石2、 石皿2(ほか)	8.27
3	SI44	5c後葉	4.00×3.40	10.76	小型	不整長方形	北壁東寄り	不明	1	貯蔵穴1 間仕切り溝1	土師器、北大I	—	円板形石製模造品1 黒曜石4、方割石1	9.09
4	SI36	5c後葉～ 6c初頭	4.08×3.56	11.21	小型	長方形	北西壁中央 →西寄り	長半地下	—	貯蔵穴1 間仕切り溝1	土師器、北大I	鉄鎌？1	琥珀玉未製品2 黒曜石3、敲き石2	59.56
5	SI41	5c後葉～ 6c初頭	3.08×3.04	8.29	小型	方形	北壁中央	無	3？	—	土師器	—	—	—
6	SI1	5c末～ 6c初頭	5.80×5.60	28.20	大型	方形	北壁中央	無	3	貯蔵穴1	土師器、北大I	白玉1	黒曜石10、方割石1、 軽石製品3	2.3
7	SI35	5c末～ 6c初頭	4.58×4.56	15.27	中型	方形	北壁東寄り	長半地下	—	貯蔵穴1 間仕切り溝2	土師器、北大I	鉄鎌1	白玉2、ガラス玉1 黒曜石1、方割石2、 石皿1(ほか)	17.66
8	SI38	6c前葉	4.05×3.82	12.15	中型	不整長方形	西壁中央	不明	—	貯蔵穴2 高坏1	土師器、須恵器	—	黒曜石3、方割石1、 砥石1	—
9	SI40	3c～ 5c末以前	2.72×2.64	(4.80)	小型	不整形	—	—	—	※薄い貼床	続縄文？	—	黒曜石1	—
10	SI29	3c～ 5c末以前	3.02×3.00	5.97	小型	不整形	—	—	—	※部分的で薄い貼床	土師器	—	—	—
11	SI33	3c～ 6c前葉以前	2.88×2.48	5.28	小型	長方形	—	—	—	※貼床	土師器	—	—	—

註1: 小型10㎡前後、中型15㎡前後、大型25㎡前後

表2 田向冷水遺跡古墳時代竪穴建物一覧

(5) 遺物の構成要素と特徴

田向冷水遺跡の古墳時代集落からは、大まかに言うと器の類である土器と、鉄製品・石製品などの道具の類がみつまっている。これらを、これまでの一般的な理解で分類すると、古墳文化に由来するものが「土師器、須恵器、鉄製品、石製模造品、玉類」、続縄文文化に由来するものが「続縄文土器、黒曜石製石器、方割石」となる。

① 土器について

土師器は坏、壺、甕、甔、手捏土器などがみられ、須恵器は坏、壺、甕、高坏が出土している。

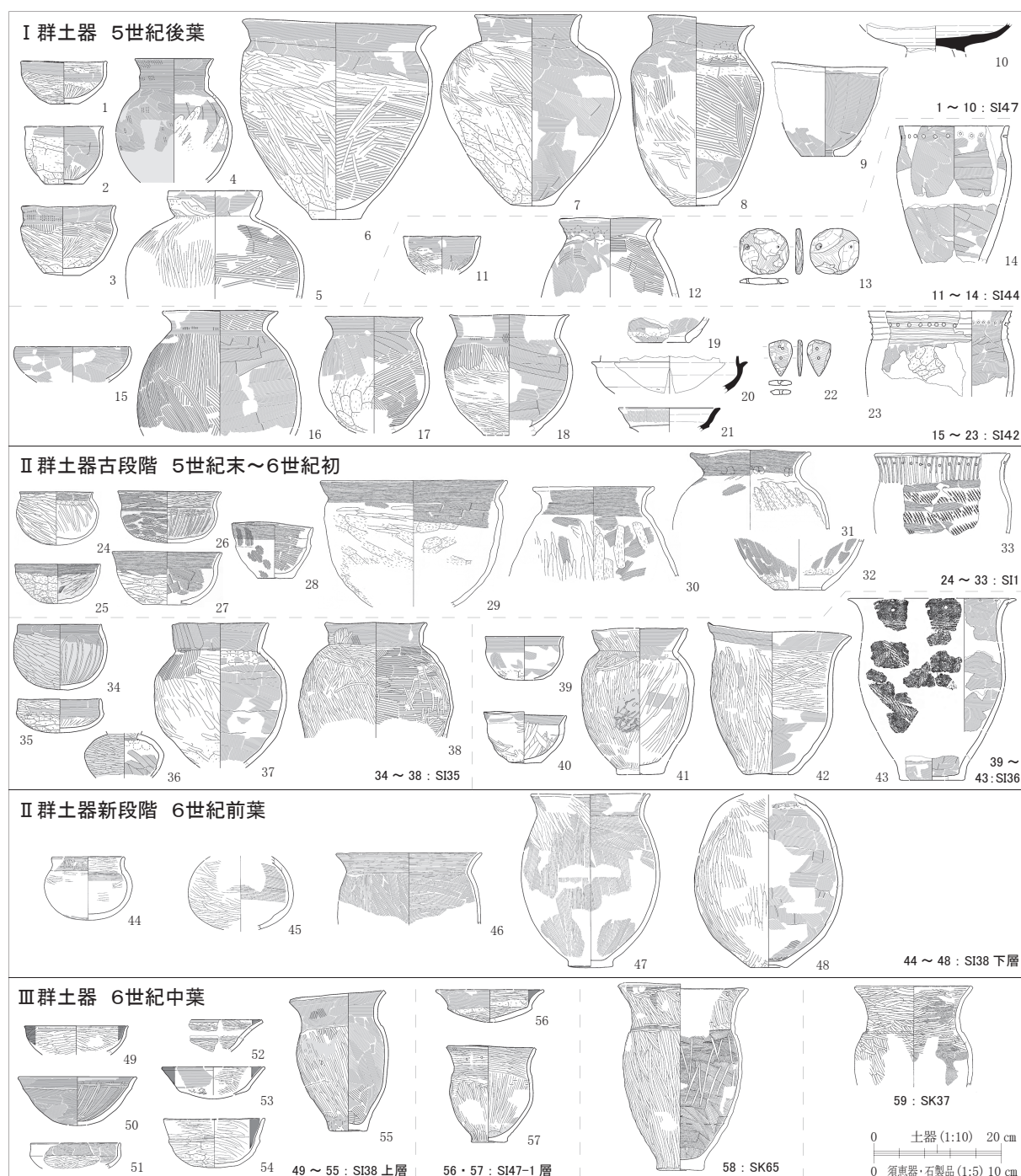


図5 田向冷水遺跡土器変遷図

続縄文土器は深鉢を主体に、鉢と片口も若干認められる。これらの土器は、これまでの検討によってⅠ群土器(5世紀後葉)→Ⅱ群土器古段階(5世紀末～6世紀初)→Ⅱ群土器新段階(6世紀前葉)→Ⅲ群土器(6世紀中葉)に分類されている(小保内2006、宇部2011)。指標となる遺物を図5に示した。

Ⅰ～Ⅱ群は、東北地方南部の引田(佐平林)式に併行すると考えられる土師器の坏・壺・甕・甗・手捏土器を主体とし、TK216～23段階の須恵器坏・甕と北大Ⅰ式土器の深鉢が伴う。また、赤褐色胎土の土師器がⅠ群で約57%、Ⅱ群古段階で約44%、Ⅱ群新段階で約11%伴う。

Ⅰ群の坏は平底で直立口縁のものが優位なのに対し、Ⅱ群の坏は半球形の体部で内面頸部に稜をもつ坏が優位となる。甕の違いは不明瞭ながら、Ⅱ群古段階から口縁部のミガキが目立つようになり、Ⅱ群新段階で長胴化する傾向にある。これに呼応するように、続縄文土器の口縁部も長くなる傾向が認められる。

住社式に併行するⅢ群は、土師器の坏・甕を主体とし、赤彩土器は残るものの赤褐色胎土の土師器と北大式土器はみられなくなる。替わって、内面黒色処理の坏が一定量伴い、坏52や甕55・57のようにヘラミガキを多用し口端の角張るものが現れる。Ⅲ群期には、赤褐色胎土の土師器の消滅と内黒土器の採用といった、東北南部と連動した動きを見せつつ、東北北部型とされる甕55のような在地型の土師器甕が出現する。

なお遺跡全体として、土師器は完形のものが多く172個体、続縄文土器は破片しかないものの52個体検出されている。個体数では3:1ほどの比率なのに対し、土師器の遺存率が圧倒的に高く、建物内ではその傾向が一層強くなる。続縄文土器は、遺存率の低さや、拡張後の支柱に北大Ⅰ式の口縁部破片が埋納されたSI1の例から、日常用の食器であった土師器とは異なる使い方や捨て方をされていた可能性がある。例えば、祭祀・儀礼に伴う破碎や埋納、古墳集落内外での分祀といった特殊な使われ方が想定される。

② 鉄製品について

竪穴建物跡から鉄鏃、刀子、棒状鉄製品など4点みつまっている(図6)。SI35から出土した343は鏃身両丸造の長三角形を呈する鉄鏃で、逆刺の外反は弱い。角棒状の373は鉄鏃の柄の一部であろう。490は刀子、491は丸棒状を呈する鉄製品であるが用途は不明である。

田向冷水の対岸に位置する市子林遺跡の土坑墓SK15から、長三角形鏃が7点出土している。鏃身部分が大きく幅広なのこの鉄鏃に対し、343は全体的に細身で薄い。同じ古墳時代中期のなかでも、市子林遺跡例がより古く、343は新しい時期のものとみられ、SI35の土器が5世紀末～6世紀初であることと符合する。

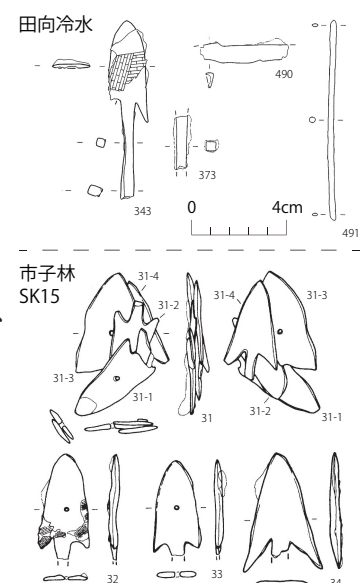


図6 鉄製品

③ 石器について

堅穴建物跡からは、搔器、削器、方割石、磨り石、敲き石、石皿、砥石、軽石製品など70点を超す石器が出土している。

このうち、扁平な円礫を長さ10cm前後に分割した方割石は、SI42・47・44・1・35・38から合わせて8点出土した。石材は凝灰岩・はんれい岩・砂岩・安山岩・頁岩がみられ特に偏りはなく、分割回数に規則性は認められない。明瞭な使用痕が認められるものはなく、分割面の縁辺に潰れがみられるもの、被熱しているものがある程度である。中半入遺跡では、黒曜石製石器と方割石は出土に相関関係が認められ、セットとなる加工具とされている（高木2002）。田向冷水遺跡においてはそのような状況は認められなかったが、集落全体の性格を考えれば、方割石も加工具の一種であった可能性が高い。

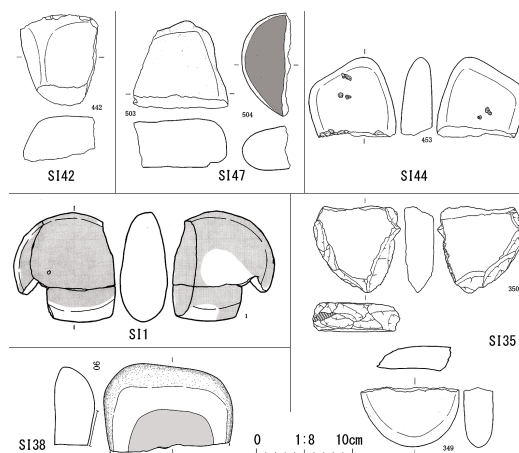


図7 方割石

④ 黒曜石製石器について

遺構内外合わせると70点以上出土しており、搔器、両極石器、素刃削器といった器種と、使用痕剥片、石核、剥片・碎片類が認められている。48点の使用痕分析を行った結果、黒曜石製石器は皮革加工に利用され、着柄の可能性があるという。また、使用痕は定型的な石器全てにみられたわけではなく、剥片類においても観察されている。

これら使用痕の認められるものは、床面あるいは下層から検出されたものが多く、堅穴建物内で使われた道具の一つであったことは間違いない。

出土状況を見ると、大型のSI42・47・1では10点を超すのに対し、小型から中型のSI44・36・35では4点以下となる。つまり、堅穴の規模に比例する黒曜石保有率の違いは、生業活動内容の違いや、堅穴の機能が異なっていたことの証左であろう。

次に原産地についてみると、田向冷水遺跡から出土した旧石器時代から平安時代に及ぶ黒曜石は、科学的に判別されたもの41点、使用痕分析において肉眼観察されたものの27点、筆者による肉眼観察10点があり、これら計78点の推定産地を図9に掲載した。その産地は、宮城県湯の倉が約8割を占め、岩手県折居と北海道がそれぞれ約1割となっている。旧石器時代は、ちょうど八戸の反対側に位置する深浦産だったものが、弥生時代には北海道産となり、古墳時代は宮城県北西部の湯の倉産が主体、古代には再び北海道産が増加する事実は興味深い。

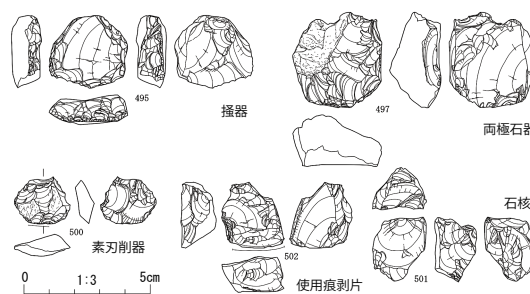


図8 黒曜石製石器 (SI47 出土品)

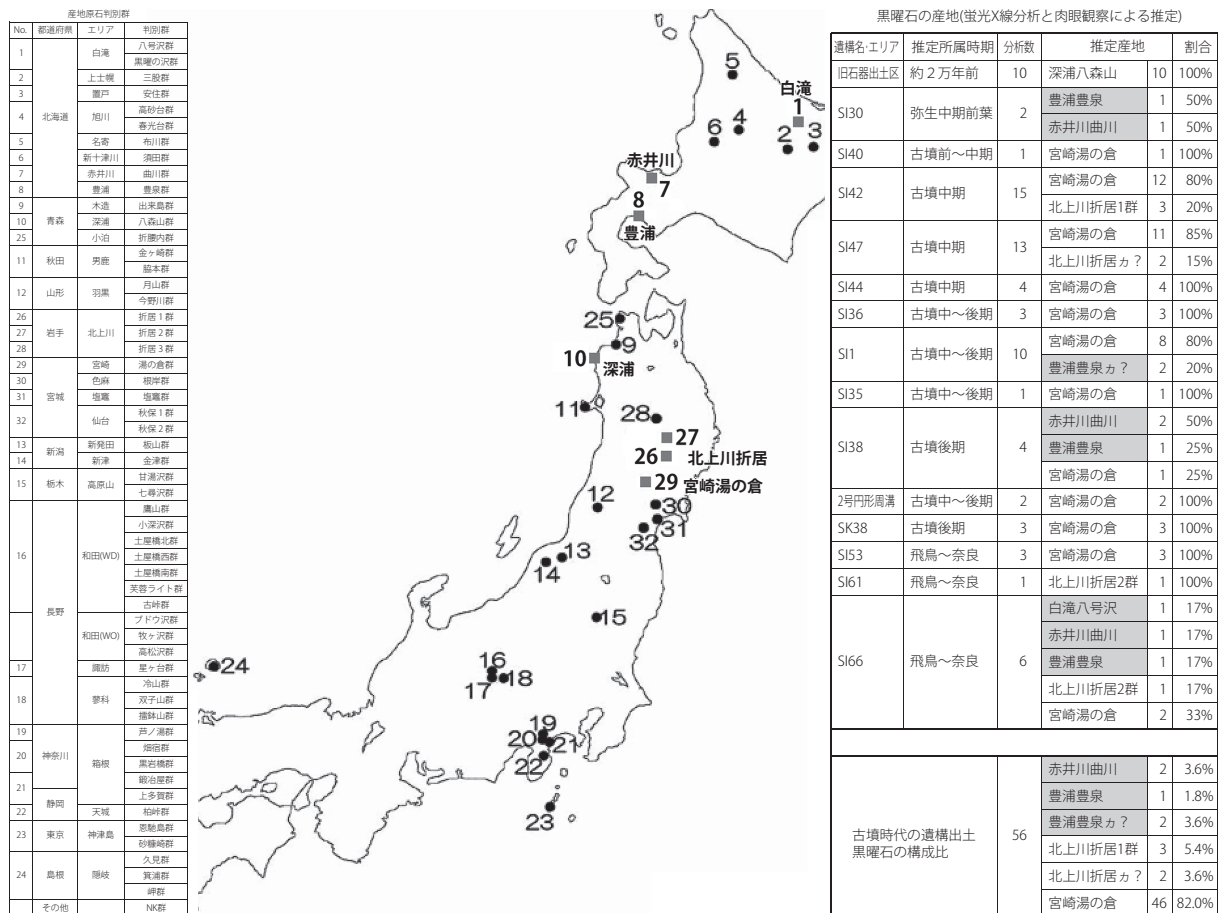


図9 黒曜石分析結果

⑤ 石製模造品について

祭祀具の石製模造品は、SI42から剣形1点が、SI44からは円板形1点が、いずれも床面から出土している。緑色凝灰岩製の剣形は、孔が頭部と中央付近の3ヶ所に穿たれ、最上部の孔は未貫通である。やや楕円形を呈する粘板岩製の円板形は、孔が2ヶ所に穿たれた、いわゆる双孔(有孔)円板である。孔の一つは表から裏へ、もう一つは裏から表へ向かって穿孔される。

岩手県中半入遺跡の双孔円板と比較すると、中型に分類された5点が非常に類似し、5世紀第3四半期とされている(高木2002)。ただし、中半入遺跡例の穿孔が全て片面から行われている点と異なり、表裏別方向の穿孔例は、宮城県仙台市南小泉遺跡第26次調査SR-1の4層出土品などに認められる(五十嵐1998 ※SR-1は5世紀の中でも幅をもつ)。また、福島県郡山市正直A遺跡1号祭祀跡では、複数孔の剣形が11点出土しており、遺構の年代は5世紀後半から6世紀初頭とされている(山内ほか1994)。これらのことから、田向冷水遺跡の2点は、5世紀後葉のものとみて良いだろう。

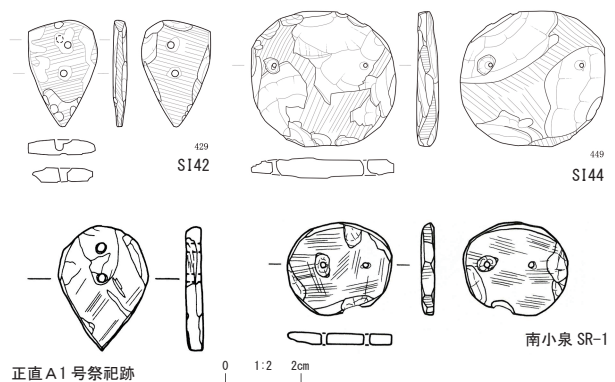


図10 石製模造品

⑥ 玉類について

装身具の玉類は、石製白玉4点、勾玉1点、ガラス玉1点が出土しており、古墳社会の習俗が持ち込まれたことを示す。白玉は頁岩製で、1点が断面円筒状を呈し、他は太鼓胴状を呈する。勾玉も頁岩製で、全体に丁寧な研磨がみられる。ガラス玉には若干気泡が認められる。

市子林遺跡では、土坑墓4基から石製白玉・管玉、琥珀製丸玉、ガラス玉が出土し、409点に達する白玉は緑泥石岩・緑色凝灰岩・軟玉などを素材とする(大野2004)。白玉は断面円筒状を呈するものが主体で、管玉様のものを切断して作った

ものとみられ、このような例は森ヶ沢遺跡にも認められている(阿部2008)。また、北海道礼文町香深井5遺跡の土坑や墓坑、遺構外から出土した「石製小玉」と報告されている白玉は、管状のものを輪切りにして作ったものと推定されており(種市ほか1997)、より北の類例として挙げることができる。

堅穴建物からの出土である田向冷水遺跡例と、多くが墓から出土している上記3遺跡の白玉では製作技法上の違いが認められる。このことは、何よりも時期の違いを表していると思われるが、生産と流通を含めた系統の違いも示しているのかもしれない。

なお、6軒(SI42・47・44・36・1・35)の堅穴建物跡の床面や掘り方などから、細かく砕けた琥珀が一定量出土している。研磨痕を有し、穿孔は認められないものの玉未製品と考えられるものが3点あり、図示した1は棗玉様を呈する。

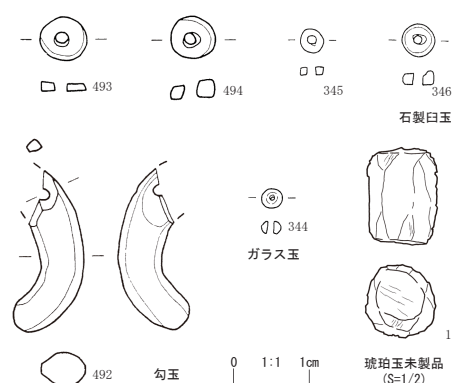


図 11 玉類

(6) 生業

堅穴建物跡の半数に地床炉が残され、石器の中で最も多く出土した黒曜石製石器に皮革加工の痕跡を認めることなどから、田向冷水の集落は工房的な性格が強く、皮革生産が主たる生業であったと考えられる。加えて、小規模ながら琥珀の加工も行っていた。

使用痕分析により定型的な石器だけでなく剥片にも皮革加工の痕跡が観察され、黒曜石以外の石材であっても黒曜石と同様の形態をとるスクレーパーもあるなど、使えるものは何でも使っていた状況がうかがえる。したがって、様々な用途が想定される方割石、敲き石、石皿なども含め、皮革加工の一連の工程の中で使うことがあったのかもしれない。

食料生産については、建物内からオニグルミ・トチノキ・イネなどの炭化種実がみつかったことから、一定規模の採集活動と農耕も行われていたと考えられる。また、石鏃や骨角器などの狩猟具はみつからないが、遺跡の近くは新井田川と松館川が合流する絶好のサケの漁場であり、漁撈も生業の一部を成していたとみるのが自然であろう。

2. 土器

ここまで田向冷水遺跡の遺構と遺物の概要について確認した。ここからは、八戸地域における古墳時代中期から後期にかけての土器の変遷についてみていく。

(1) 変化する続縄文土器

田向冷水遺跡では、続縄文土器が52個体分みつまっている。これらはⅠ群からⅣ群に分類されており（小保内2003）、図12に示した。

Ⅰ群は、口唇及び隆線上に刻目をもち、頸部は「く」の字に外傾、胴部にはナデ消す帯縄文、又は刺突列が付属する帯縄文がみられる。微隆起線はない。北海道の同時期の資料に比べ胴部の丸みが強い。Ⅱ群は、突瘤文と口唇ないしは隆線上に刻目をもち、口縁部は外反、胴部には刺突列が付属する帯縄文、又は微隆起線が付属する帯縄文がみられる。突瘤文以外の文様属性は限りなくⅠ群に近く、波状口縁である点も共通する。

Ⅲ群は、突瘤文をもち、口縁部は「ノ」の字に外反、隆線があるものは横走又は縦走し、胴部に文様があるものは帯縄文となる。Ⅳ群は、突瘤文+沈線、又は口縁部に縄文+沈線がみられる。ⅠからⅢ群の深鉢形土器は、文様属性の変化と合わせて、胴部と頸部が次第に伸びることによって器高が高くなるという傾向を認めることができる。なお、胴部破片を含めても、帯縄文・微隆起線・刺突の三要素が組み合う資料は1点も認められていない。

次に、市子林遺跡の土坑墓から出土した土器を見ると、SK11では未だ類例のない23と北大Ⅰ式土器24が共伴し、SK15では作りの雑な土師器坏29と北大Ⅰ式土器30が共伴し

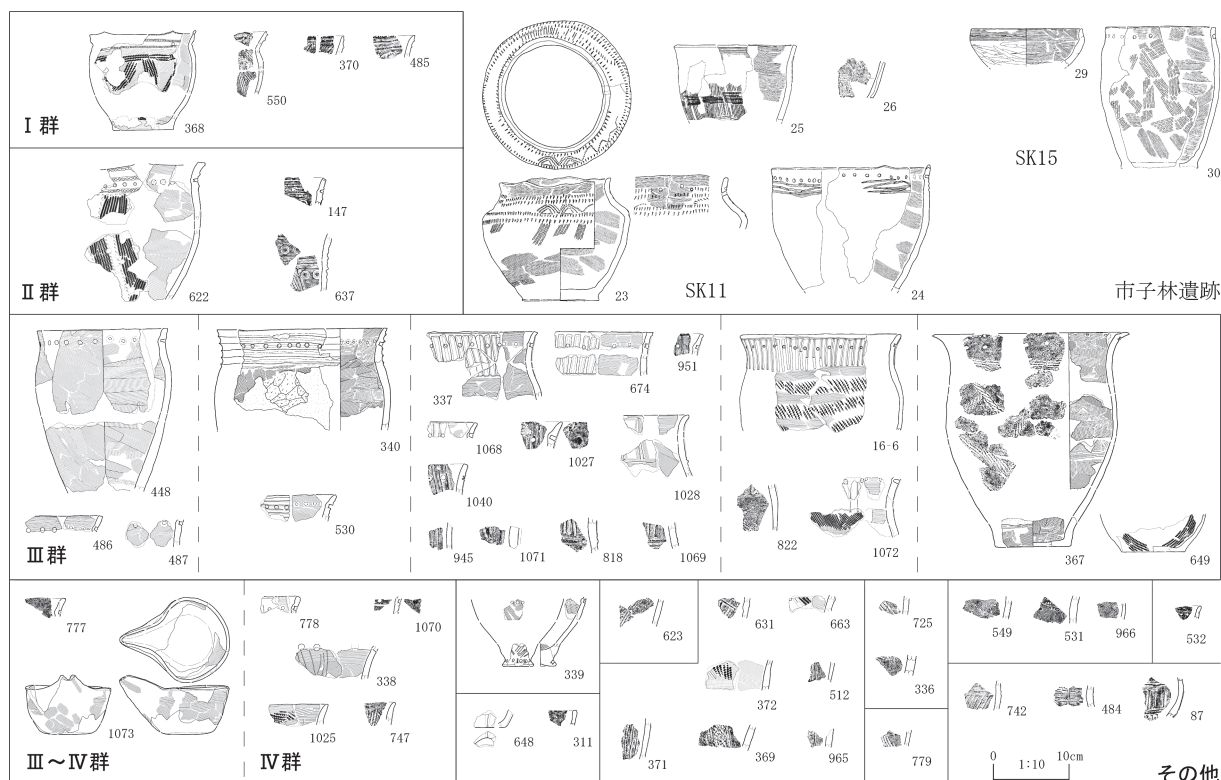


図12 田向冷水遺跡出土の続縄文土器及び市子林遺跡出土土器

ている。24と30は、胴部が直線的で頸部に括れがほとんど認められないことから、田向冷水Ⅲ群より古く位置付けられる。

壺形土器の23は、頸部と肩部に刺突列が巡り、一箇所だけに鋸歯状の列点文が施され、北大Ⅰ式土器の範疇にはない形態と文様を呈す。強いて言えば、文様モチーフや全体に重量感のある感じはオホーツク土器に似ており、鋸歯状の列点文は鈴谷式の縄線文に見えなくもない。いずれにせよ、北大式の分布域よりさらに北の土器との関連が注目される資料である。

(2) 続縄文土器の年代観

土師器・須恵器と共伴したⅢ群を定点としてその前後を考えると、市子林の資料が5世紀中葉、Ⅱ群は5世紀前葉、Ⅰ群は4世紀後半と想定しておきたい。Ⅳ群は、諸属性からみて型式学的には北大Ⅱ・Ⅲ式に当てることが可能であり、Ⅲ群に後続すると考えられることから、6世紀前葉から中葉を想定しておきたい。

なお、宮城県旧築館町伊治城SD260・261では、4世紀中葉から後葉の塩釜式と北大Ⅰ式土器が共伴しており（佐藤1992）、数ある共伴事例の中で格段に古い。ただし、同遺構の資料の中には本稿で言うⅡ群に相当する破片資料（41P-6・45P-27）も含まれることや、同じ宮城県内の仙台市鴻ノ巣遺跡SD26では後北C2-D式末（本稿Ⅱ群相当）と南小泉式期古段階の土器が共に出土している（工藤2004）など、北大Ⅰ式の型式認定と年代観はなお検討を要する。

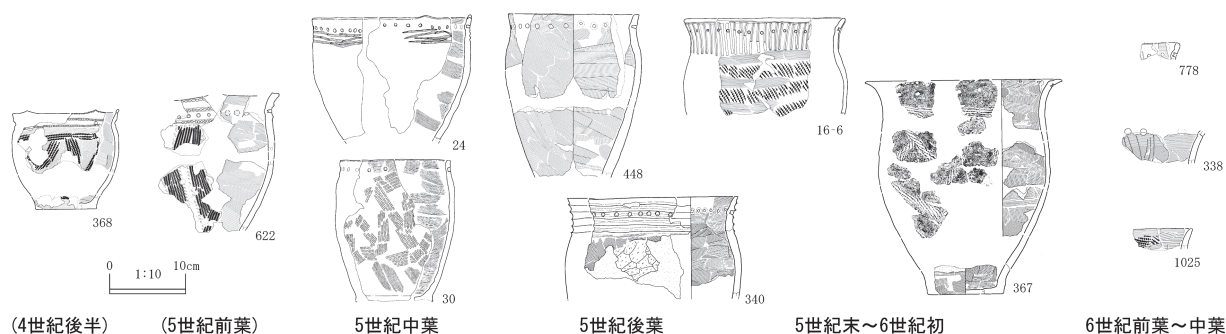


図13 八戸地域における続縄文土器の変遷

(3) 東北北部型土師器の誕生

ここまで、田向冷水遺跡の古墳集落においては、土師器が東北南部と連動して変化すること、続縄文土器もそれと呼応するように変化することを述べてきた。では、頸部に稜又は段をもち口縁部が強く長く外反する器形でミガキ調整が多用されるⅢ群土器の甕、すなわち東北北部型土師器がどのように生まれたのかみてみたい。

まず、5世紀中葉以前では、在地集団が作ったとみられる八戸市笹ノ沢(3)遺跡SK257出土の617と、市子林遺跡SK15出土の29は、いずれも調整が雑で厚手の擬似土師器坯である。これらは、東北南部以南の坯を見本とし模倣して作ったものと考えられ、モノの

交流によって在地の土器が変化し始めた模倣段階であることを示す。

次に、5世紀後葉Ⅰ群土器の共伴例である、田向冷水遺跡SI44の北大Ⅰ式土器深鉢448と土師器甕444は、胎土・器厚・調整がいずれも似通っており、同一人物が作ったのではないかとさえ思われるものである。また、5世紀末～6世紀初Ⅱ群土器古段階の共伴例である、SI36の北大Ⅰ式土器深鉢367と土師器甕366とでは、文様こそ異なるものの色調と器形は非常に良く似ている。

これらの事例は、模倣とか外部から持ち込まれたというより、人と人が直接交流したことによって生じた、融合の結果であると考えられる。

6世紀前葉Ⅱ群土器新段階では、続縄文土器との共伴例を欠き詳らかではないが、土師器の長胴化がより一層進む。

6世紀中葉Ⅲ群土器になると、それまで長頸化してきた北大式の深鉢と、長胴化した土師器とが合わさり、389・969のような東北北部型土師器が出現する。

また、細部を見ると、土師器甕482と内黒処理される坏383は、口唇部が角頭状を呈する点が全く同じであるだけでなく、口端部と頸部及び内面に赤彩する点まで共通する。このことからすると、長頸・長胴化に加えて、住社や舞台式に象徴される有稜有段の外反坏の作り方が、坏だけでなく甕の口縁部にも採用されることで、東北北部型土師器の出現を促したものと考えられる。

こうした黎明期の東北北部型土師器に類似するものは、北海道恵庭市カリンバ2遺跡、秋田県横手市田久保下遺跡、宮城県大崎市日光山古墳群（古川市2006※高橋誠明氏御教示による）など広範囲で認められている（註）。北大Ⅰ式土器の分布圏内、特に東北北部では北大Ⅰ式土器に替わる土器として定着していったものとみられる。

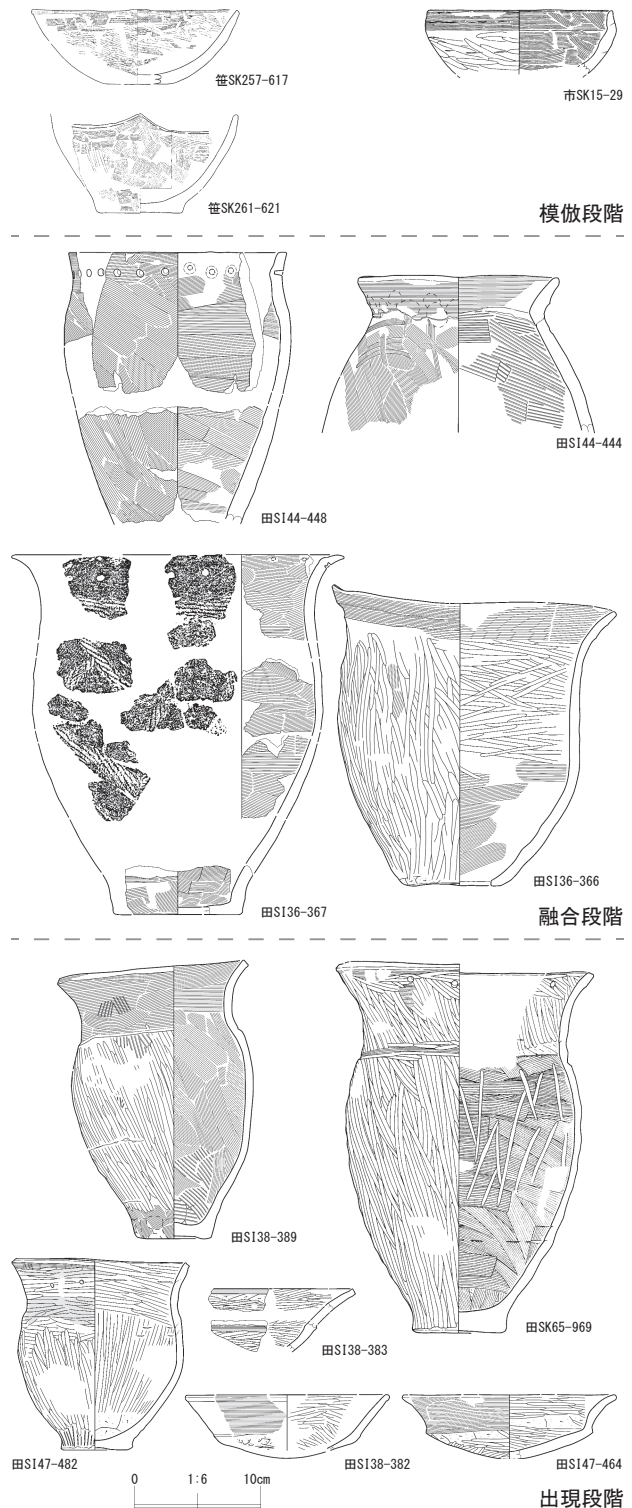


図14 東北北部型土師器の誕生

3. 墓制

ここでは、古墳時代中期から後期の墓として、森ヶ沢遺跡と市子林遺跡の土坑墓、田向冷水遺跡の円形周溝に加え、墓坑の可能性ある笹ノ沢(3)遺跡例・田向冷水遺跡例、及び八戸城跡の土坑を取り上げ、八戸周辺の墓の変遷を概観する。

(1) 各遺跡の事例

番号	遺跡名	遺構名	時期	規模cm		構造		出土遺物						
				長×短	深さ	平面形	付属施設	土器(H=土師器、S=須恵器、Z=統建文土器)	玉	鉄製品	黒曜石	方解石	その他	
1	1	笹ノ沢(3)	SK221	5C前後	68×63	31	円形		H甕片1					川原石1
2	2	笹ノ沢(3)	SK257	5C前後	72×69	19	円形		H坏1				2	板状自然礫1
3	3	笹ノ沢(3)	SK261	5C前後	85×75	26	楕円形		H鉢3・H甕片1				2	台石1、自然礫13
4	1	森ヶ沢	1号墓	5C	135×115	40	楕円形	袋P		ガラス小玉12、白玉239			6	
5	2	森ヶ沢	2号墓	5C	130×90	20	楕円形	不明		白玉226	鉄釧片5	11	1	礫1
6	3	森ヶ沢	3号墓	5C	125×90	60	楕円形	袋P		白玉1	吊金具1	6		礫5
7	4	森ヶ沢	4A号墓	5C	92×60	40	楕円形	袋+柱P	H碗1、Z碗1(北大Ⅰ)	白玉265	刀子1	2		
8	5	森ヶ沢	4B号墓	5C	108×	40	円形			白玉30				
9	6	森ヶ沢	5号墓	5C	96×75	40	楕円形	袋+柱P				16		
10	7	森ヶ沢	6号墓	5C	90×87	40	円形			白玉42		2		
11	8	森ヶ沢	7号墓	5C	216×162	90	楕円形	袋P	H碗片1、S高坏片1	ガラス小玉7、白玉1013、琥珀原石1	釧片1、刀子片7、棒状品ほか計23	29	1	堅櫛1、川原石1
12	9	森ヶ沢	8号墓	5C	102×84	45	楕円形	袋P	H碗1、S高坏片1	白玉346	刀子鞘片2	12		
13	10	森ヶ沢	9号墓	5C	172×130	75	楕円形	袋P	Z甕1(北大Ⅰ)	白玉171	刀子片8、鉄釧片8計16	30		川原石礫1
14	11	森ヶ沢	10号墓	5C	95×70	24	楕円形	袋P	Z片口1(北大Ⅰ)	琥珀玉39、埋木玉3、白玉174	環状品1、刀子3、ヤリガンナ1			堅櫛1、赤色土塊、砥石
15	12	森ヶ沢	11号墓	5C	150×85	10	楕円形	不明		白玉73		4		
16	13	森ヶ沢	12号墓	5C	145×106	60	楕円形	袋P		ガラス小玉1、白玉10	刀子片2	12	1	礫9
17	14	森ヶ沢	13号墓	5C	70×	70	12 楕円形	袋P	H高坏1	白玉50	銅小塊1			堅櫛2
18	15	森ヶ沢	15号墓	5C	77×64	20	楕円形	袋+柱P	H坏1、S蓋1、Z片口1(北大Ⅰ)	ガラス小玉26、白玉4	刀子1	29		
19	16	森ヶ沢	16号墓	5C	90×	20	円形			白玉1				礫4
20	17	森ヶ沢	17号墓	5C	70×	12	円形			白玉2				
21	18	森ヶ沢	18号墓	5C	80×	5	円形			白玉15		3		
22	19	森ヶ沢	19号墓	5C	50×	10	円形	不明	H甕1(報文は北大式)					
23	20	森ヶ沢	20号墓	5C	67×35	14	楕円形	袋+柱P	Z片口1(北大Ⅰ)					堅櫛1
24	21	森ヶ沢	21号木棺墓	6C?	210(180)×95(70)	56(50)	長方形							赤色顔料土塊
25	1	市子林	SK10	5C	160×104	37	楕円形	袋P	Z深鉢2(北大Ⅰ?)	ガラス玉1、白玉20	小環1			
26	2	市子林	SK11	5C	147×106	34	楕円形	袋P	Z壺1・深鉢2(北大Ⅰ)	管玉3、琥珀玉4、白玉245	鉄釧1、棒状品1			
27	3	市子林	SK14	5C	112×110	34	円形	袋P	Z深鉢1(北大Ⅰ?)	白玉27				
28	4	市子林	SK15	5C	110×100	42	不整円形	袋P	H坏(南小泉～引田)、Z深鉢1(北大Ⅰ)	ガラス玉3、白玉117	鉄鑑7			
29	1	八戸城跡	SK14	5C後葉	137×60～	18	隅丸長方形		S施1					
30	1	田向冷水	SK33	6C中葉	90×80	14	楕円形		H甕片2(Ⅲ群)					小礫1
31	2	田向冷水	SK34	(6C中葉)	83×74	18	円形		H甕片1					底面に礫2
32	3	田向冷水	SK35	(6C中葉)	72×70	10	円形							ほぼ底面に礫3
33	4	田向冷水	SK36	(5～6C)	81×70	11	楕円形		H甕片1					
34	5	田向冷水	SK37	6C中葉	65×58	7	楕円形		H甕1(Ⅲ群)					
35	6	田向冷水	SK38	6C中葉	94×87	9	楕円形		H坏片1(住社)・甕1(Ⅲ群)			4		底面直上に礫6
36	7	田向冷水	SK49	6C中葉	94×94	30	円形		H坏2(住社)・甕片4(Ⅲ群)、Z深鉢片1(北大Ⅰ)					小礫5
37	8	田向冷水	SK51	(5～6C)	90×88	12	円形		H坏片1、Z深鉢片1(北大Ⅰ)					磨り・敲き石1、小礫4
38	9	田向冷水	SK53	6C中葉以降	83×78	43	不整円形		H坏片1(住社～)					小礫1
39	10	田向冷水	SK54	(6C中葉)	88×80	17	不整円形		H甕片1			1		礫14
40	11	田向冷水	SK55	(5～6C)	97×84	11	不整円形							
41	12	田向冷水	SK56	(5～6C)	92×80	12	不整楕円形		H坏片1(引田～住社)					
42	13	田向冷水	SK58	(5～6C)	97×92	21	円形		H坏片1					礫2
43	14	田向冷水	SK59	6C中葉	108×98	51	円形		H坏片1(住社)・甕片1、Z深鉢片1・壺片1(北大Ⅰ)					小礫2
44	15	田向冷水	SK65	6C中葉	185×48	44	長楕円形		H坏片1(引田～住社)・甕1(Ⅲ群)					礫3
45	16	田向冷水	SK69	(5～6C)	66×61	15	円形							磨り石1
46	17	田向冷水	SK70	(4～6C)	68×65	19	不整円形							
47	18	田向冷水	SK72	(4～6C)	×71	20	楕円形							
48	19	田向冷水	SK73	(4～6C)	×76	14	楕円形							
49	20	田向冷水	SK77	6C中葉	86×81	20	不整円形		H甕片2(Ⅲ群)					小礫3
50	21	田向冷水	SK78	6C中葉以前	88×	39	不整楕円形		H坏片1(引田～住社)					小礫1
51	22	田向冷水	SK90	5C後葉～6C初	100×99	54	円形		H坏片1(引田)・甕片1(Ⅰ～Ⅱ群)					石鑑1、礫1
52	23	田向冷水	SK98	(6C中葉)	90×82	23	円形							礫4
53	24	田向冷水	SK108	6C中葉	84×75	17	不整円形		H坏片1(住社)					底面に礫25
54	25	田向冷水	SK115	6C中葉	72×68	9	円形		H坏片1(住社)・甕片1					小礫23
55	26	田向冷水	SK116	5C後葉～6C中葉	79×75	52	円形		H坏片1(引田～住社)、Z深鉢片1(北大Ⅰ～Ⅱ)					
56	27	田向冷水	SK117	5C後葉～6C初	80×76	48	円形		H甕片1(南小泉～引田)、Z深鉢片2(北大Ⅰ)					ウバガイ、礫8
57	1	田向冷水	2号円形周溝	5C後葉～6C中葉	外:8.96m 内:6.7m 溝:2.27m				H甕片2(Ⅰ～Ⅲ群)、S壺片1、Z深鉢片1(北大Ⅰ)			2		礫613

表3 青森県内における古墳時代中期から後期の関係土坑墓・土坑一覧

笹ノ沢 (3) 遺跡：3基検出され、周囲にある9基の土坑も同時期のものと推定されている（青森県2003）。平面形は円形基調で、規模は径0.7m前後である。続縄文土器の特徴を併せもった土師器坏・鉢・甕の破片が出土しており、5世紀前後のものと推定されている。ほかに黒曜石の剥片、台石、礫が伴う。

森ヶ沢遺跡（七戸町）・土坑墓：20基が群集する。平面形は楕円形と円形の二種類があり、楕円形のものは長径0.7～2.2mと大きさには幅がある。円形のものは径1m前後の規模である。これらは、家族的なまとまりを単位とするいくつかのグループに分かれながら、10号墓を中心に外周へと営まれ、墓の規模と出土品の多寡に相関関係が認められている（阿部2008）。半数を超す12基に袋状ピットが、さらにその中の4基には柱穴状ピットも付属する。遺物は、土師器、須恵器、北大Ⅰ式土器、鉄製品、黒曜石、多量の石製玉類などが出土している。阿部の報告では、5世紀中葉以前に納まる土坑墓群であるとしている。

木棺土坑墓：1基検出（21号）。土坑と木棺ともに長方形で、掘方の上面規模は長軸2.1m×短軸0.95m、木棺は長軸1.8m×短軸0.7mの規模である。先行する楕円形・円形土坑墓群の系譜をひく、6世紀代のものとされている（阿部2008）。

市子林遺跡：4基検出。平面形は楕円形と円形の二種類があり、それぞれ長径1.5m、径1.1mの規模である。全てに袋状ピットが付属し、主軸方向から2基1対で配置されたものとみられ、SK11と15の組の方が厚葬である。石製白玉を中心に管玉、ガラス玉、鉄鏃、鉄釧などが副葬されている。土器は前述したように、北大Ⅰ式深鉢、壺形土器、擬似土師器坏が出土している。

八戸城跡：1基検出。平面形は隅丸長方形で、長軸1.4m程度の規模である。TK208段階の須恵器が出土しており、5世紀後葉のものとみられる。周辺からは土師器坏、黒曜石製石器も出土しているが、続縄文土器はみつかっていない。

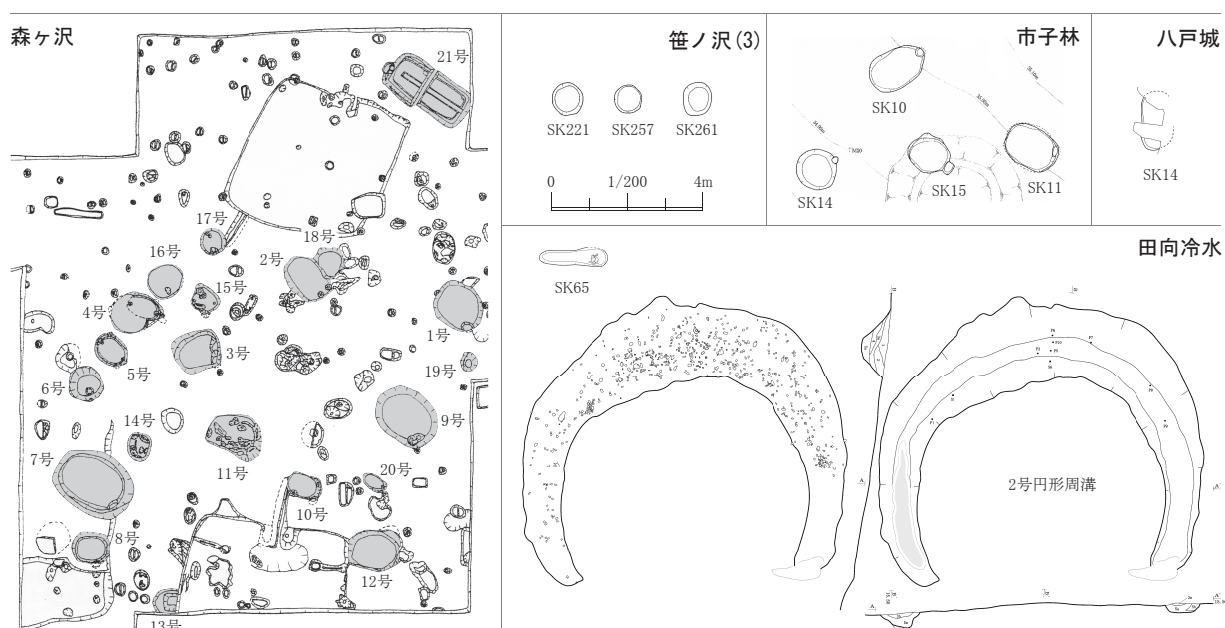


図 15 土坑墓・土坑集成

田向冷水遺跡・土坑：27基検出。三箇所に分かれ、それぞれで群集する。26基は円形を基調とし、径0.9m前後、深さ平均25cmの規模である。大半が埋め戻され、18基の土坑に礫が伴う。礫は、底面から数十cm上にかけて検出されており、後世に削平を受けた浅い土坑にも礫が伴っていた可能性がある。土師器坏・甕、続縄文土器深鉢、黒曜石剥片などが出土している。5世紀後葉のものは少なく、竪穴建物跡が無くなった後の6世紀中葉のものが多い。長楕円形のものとして唯一検出されたSK65は、長軸約1.9mの規模を有し、ほぼ完形の土師器甕(図5の58)が坑底直上から出土している。

円形周溝：1基検出、削平を受けているため本来の平面形と開口部の有無は不明。規模は、外径約9m、溝幅約0.9～2.3m、深さ11～81cmである。周溝の底面は、壁上面の比高差約1.4mに対し0.3mほどしかなく、平坦に近く整えてある。周溝から総数613点の礫が検出され、本来は盛土と葺石がされた円墳と推定された。石材は近くの河川敷で一般的にみられるものであり、遺跡周辺から採取したものと考えられる。溝からⅢ群期の土師器甕、北大Ⅰ式土器の深鉢、須恵器壺類、黒曜石製石器などが出土している。埋葬施設の検出を欠くため断定できないが、竪穴建物跡が存続した時間幅(5世紀後葉～6世紀前葉)の中でも、その終わりに近い時期に構築されたものと考えている。

(2) 円形土坑から木棺土坑へ

森ヶ沢例は、核となる墓坑を中心に展開する。そして、袋状ピットなどが付属する森ヶ沢・市子林例では、大小異なる規模あるいは楕円形と円形のものがセットになる。核となる墓坑は社会的地位を示し、セット間の規格の違いは家族関係や葬方の違いを表すのかもしれない。これらは続縄文文化の所産である。

複数から成る笹ノ沢(3)例と三箇所に分かれて群集する田向冷水例は、これまでの一般的な理解に従えば、礫を伴う墓坑であった可能性がある。これらも続縄文文化の所産であるが、森ヶ沢例などと異なり規格に大きな違いを認めず概ね小型である。田向冷水例については、古墳社会との交流・接触によって、社会的地位や家族関係に何らかの変化が生じ、ある制約の中で均一な規格の円形土坑となったのかもしれない。

今のところ単独で検出されているのが、八戸城・田向冷水2号円形周溝とSK65・森ヶ沢21号墓である。八戸城例は、5世紀後葉段階で隅丸長方形の土坑であること、遺跡内全体で未だ続縄文土器を見ないことなど、他の遺跡と比べ異質な部分があり、土坑の性格を特定するのは難しい。古墳文化側の所産であるとみておきたい。

田向冷水遺跡においては、円形土坑と同時存在した円墳の2号円形周溝の段階を経て、長軸約1.9mの規模を有する長楕円形型の土坑SK65が築かれる。そこには、東北北部型土師器の甕が納められた。本遺構の担い手は、古墳でも、続縄文でもなく、東北北部型土師器を作り使った、その人である。さらに同じころ、森ヶ沢に木棺土坑墓が築かれる。森ヶ沢21号墓は、末期古墳出現直前の7世紀初め頃に築かれた、おいらせ町阿光坊遺跡2号土壇へとつながる可能性を示すものとして重要である(註)。

4. 南北交流と境界

(1) 南の要素と北の要素

田向冷水遺跡に残された各種遺構・遺物の特徴は、東北南部のものと共通する点が多い。例えばカマド付きの竪穴では、間仕切り溝をもつ例として福島県中通り地方の正直A・清水内・白山A遺跡、宮城県仙台平野の南小泉・鴻ノ巣遺跡などが類例として挙げられている(宇部2015)。石製模造品も同地域との関係が認められ、特に赤褐色胎土の土師器は福島県内の土器との類似性が強い。円墳は古墳文化に広く認められるものであり類似地域の特定はできないが、一定量出土している須恵器を模倣した坏にいたっては、関東地方との関係さえもうかがえる。こうしたことから、田向冷水遺跡に古墳文化の足跡を残したのは、東北南部からの移民であった蓋然性が高い。

その一方で、北の要素は在地の文化として定着していた続縄文土器、黒曜石製石器、方割石、礫を伴う土坑に限定される。直接北からもたらされたものとしては、数点の黒曜石とその可能性のある市子林遺跡の壺形土器しかなく、古墳側の文物に対して続縄文側の文物が余りにも少ない。このことは、続縄文側である北の世界からもたらされたものが、遺跡に残りにくい有機物だったことを示してはいないだろうか。

ところで、黒曜石の産地の8割が、伊治城跡から南西約30km(図17参照)にある宮城県湯の倉産であることは先に述べた。これは、田向冷水遺跡から見れば南からの産物となる。宮城県北部の大崎平野は、古墳が比較的安定して造られた古墳文化圏内であり、湯の倉はその近傍に位置する。大崎平野以北の古墳時代の状況を、「古墳社会」・「古墳系グループ」・「続縄文系グループ」に分けその関係を整理した高橋誠明氏は、三者が隔絶状態になく相互に交流していた様子を明らかにした(高橋2014)。その中で、古墳時代中期後半の大崎地方を「皮革製品の生産用具や続縄文系グループが祭祀儀礼で必要とした黒曜石の供給基地としての役割を果たした」と位置付け、続縄文系グループとの協働が認められる古墳社会の集落である

名生館官衙遺跡や、続縄文系グループが残した木戸脇裏遺跡などで黒曜石の素材生産が行われた後、他へ搬出された可能性を指摘している。

つまり、この時期の湯の倉の黒曜石は、続縄文人同士の流通だけでなく、一旦古墳社会に取り込まれ、相互交流の認められる中半入遺跡や田向冷水遺跡などに供給されていたものとみられる。

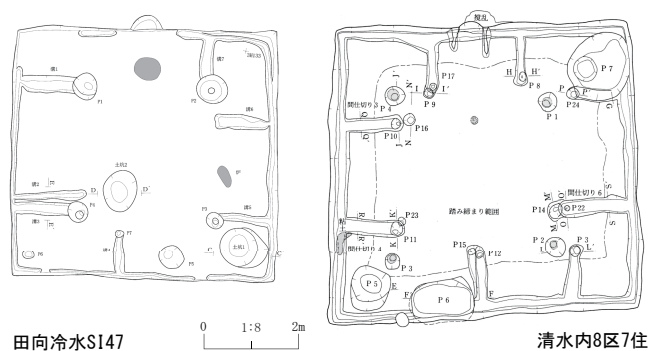


図16 共通する住居構造の一例

(2) 境界と辺境

さて、図17に古墳文化圏の範囲と、時代の下降とともに北上する続縄文土器の分布境界を示した。これを見ると、いかに田向冷水遺跡が飛び地的に存在するか分かる。ただし近年の調査例では、岩手県沿岸北部の久慈市新町遺跡から5世紀前半のカマドを伴わない竪穴建物が発見されており、田向冷水遺跡よりも前の段階で、玉の原材料として琥珀を求めた古墳社会の進出があったものと考えられている(米田ほか2009)。この事例は、特定の資源を産出する場所への進出ということで理解し易い。

ではなぜ八戸の田向冷水だったのだろうか。図17には6世紀半ばまでに施行された国造制の範囲などから推定される、ヤマト政権の北限を示した。当時は、新潟平野―米沢盆地―仙台平野を結んだ線以北に居住する人々は蝦夷とされ(熊谷2004)、同地はヤマト政権下の中央の人々から辺境とみなされていた。その後9世紀初頭にかけて次々と城柵が設置され、北に向けて拡大した古代国家による直接的な蝦夷支配は、志波城と秋田城を結ぶラインまで達する。馬淵川以北に位置する八戸は、古代を通して律令体制に組み込まれることがなく、間接的な支配関係にとどまった。このような経過をたどった地域に位置するのが田向冷水遺跡である。

八戸は、「海から拓けたまち」と形容され、海路・陸路ともに交通の要衝であり、様々な物資が集積する土地である。このような状況は、各時代の遺跡からも看取できることであり、田向冷水遺跡も例外ではない。古墳集落としては小規模ながら、続縄文集団の墓の可能性のある土坑26基と続縄文土器52個体という数は、本州島内の同時期の遺跡に比べ圧倒的に多い。つまり、本州続縄文集団の中で、田向冷水は交易・交流の拠点的な場所だったのではないかと考えられる。

青森県の下北半島では、大間遺跡、大平(4)遺跡、浜尻屋遺跡から、北大Ⅰ式土器や、6世紀の土師器・須恵器がみついている。皮革生産の原料となる海獣の皮を含めた北海道島からの産物は、一度下北を経由して下北地方の産物とともに八戸へと運ばれたのではないだろうか。その途中に位置する森ヶ沢遺跡もまた、続縄文の遺跡としては規模が大きく、津軽方面をも含めた交易の拠点だった可能性がある。田向冷水の続縄文集団は、土坑の分布状況からみて複数の

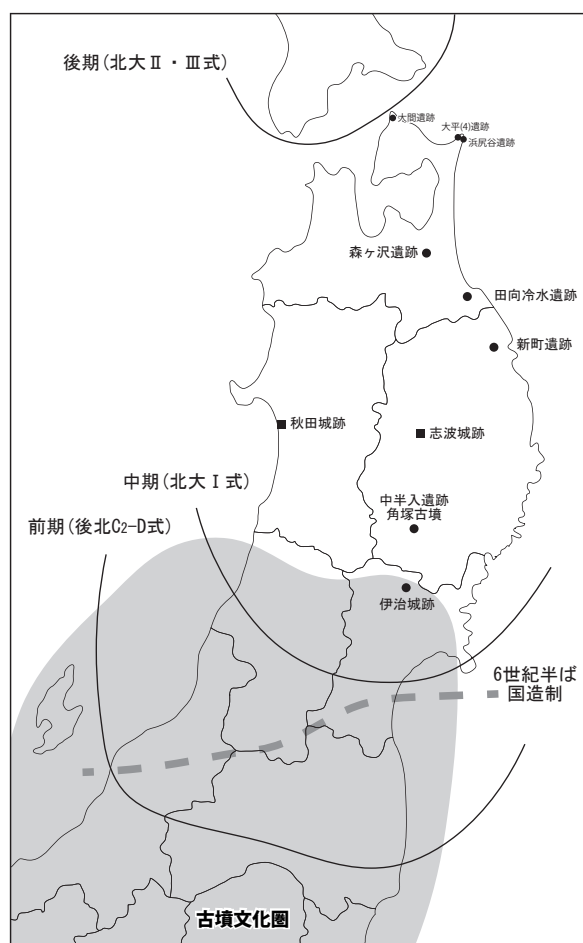


図17 古代蝦夷の世界

系統が居たものと考えられ、皮革加工を中心とする交易品の生産に携わる者、産物の交易・運搬に係る者、日常生活に係る生業活動に従事する者などが存在したのかもしれない。

おわりに

筆者は以前、田向冷水遺跡を「在地独自の文化、続縄文文化、古墳文化それぞれの特徴がみられ、古墳時代の本州北縁域における文化の多様性を示す」遺跡と位置付け（小保内2018）、皮革製品という古墳社会からの需要の高まりに応えるために出現し、手工業生産が行われていた集落であるとした（小保内2006）。その具合的な内容はこれまで累々述べてきたが、今回は北からの視点と、南からの視点に分けて考えてみた。

古墳側の社会は、彼らから見れば辺境である東北北部に、皮革を入手するため東北南部の人々を移民させ、続縄文人と協働で加工を行うだけでなく、周辺に散在する続縄文集団と、そこで加工される皮革の掌握にも努めたことであろう。田向冷水遺跡は、このようなハイブリッドタイプの集落として現在最北に位置し、古墳時代中期から後期にかけての本州北部におけるフロンティアラインであった。

一方、続縄文側の社会から田向冷水を見た場合、続縄文文化圏内の南端ではなくむしろ中心近くに位置しており（図1参照）、古墳社会の進出を受容しつつ、北海道島に対峙する下北半島が中継点となって、続縄文集団の交易拠点となったものと考えられる。

これら古墳と続縄文の社会に、極端な緊張関係や殺戮などの痕跡があったことを示す遺構・遺物は今のところ発見されていない。つまり、西部開拓における先住民に対する侵略のようなものはなく、古墳と続縄文社会は、互いに補完し合う関係で結ばれていたのだろう。しかしながら、工房的性格が強く、皮革加工を専業とした田向冷水遺跡の出現は、自然発生的なものではなく、東北南部以南の首長層による関与を想定しなくてはならない。田向冷水に暮らし皮革生産を担った集団の族長が誰であるのか、その系譜をたどることが今後の課題である。

最後に、本稿は筆者が以前墓制を中心にまとめた小稿（2018）に、交易等の検討を加えて作成したものであることをお断りしておく。また、本稿作成にあたり宇部則保氏、室野秀文氏、横須賀倫達氏に貴重なご教示とご意見をいただいた。記して謝意を表したい。

註

東北北部型土師器の類例の一つに、岩手県盛岡市上田蝦夷森古墳群第1号墳に副葬された土師器甕があり、7世紀前半から中葉のものと報告されている（室野ほか1997）。口縁部の外反が若干弱いものの、柱状の底部・胴部の丸みと頸部の絞り具合・口縁端部の角処理など共通点が多く、筆者は6世紀代に遡る可能性が高いとみている。

共伴した横矧板鋌留式衝角付冑については、型式学的にTK217（7世紀前葉）以降とされ（横須賀2009）、地方生産品であればTK209（6世紀末～7世紀初）まで遡る可能性がなくはないという（横須賀倫達氏御教示）。

このように1号墳の甕と冑は、共に年代を遡り得る可能性があり、岩崎台地遺跡群の末期古墳と同じかそれよりも古いものであることを暗示する。

引用参考文献

- 青山博樹 1999「古墳時代中～後期の土器編年―福島県中通り地方南部を中心に―」『福島考古』第40号記念号
- 阿部義平編 2008「森ヶ沢遺跡発掘調査報告〈上〉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第143集
- 阿部義平編 2008「森ヶ沢遺跡発掘調査報告〈下〉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第144集
- 五十嵐康洋 1998『南小泉遺跡 第26次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第225集
- 上屋真一・藤田光一 1987『カリンバ2遺跡』北海道恵庭市発掘調査報告書
- 宇部則保ほか 2001『田向冷水遺跡Ⅰ』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第1集
- 宇部則保ほか 2002『八戸城跡Ⅱ』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第3集
- 宇部則保ほか 2011『田向冷水遺跡Ⅳ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第129集
- 宇部則保 2015「北三陸の古墳時代集落から古代集落変遷への展望」『考古学ジャーナル』No.669
- 大野亨 2004「市子林遺跡第6次C地点」『八戸市内遺跡発掘調査報告書18』八戸市埋蔵文化財調査報告書第102集
- 大庭脩ほか 1997『「あつれき」と「交流」- 古代律令国家とみちのくの文化 - 』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 小保内裕之ほか 2006『田向冷水遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集
- 小保内裕之 2018「八戸周辺の古墳時代」『北辺域における古墳時代前期～中期の変革』岩手考古学会第50回研究大会
- 菊池俊彦 1998「サハリン出土の鈴谷式土器」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ〔道を辿る〕
- 木村高 2011「二 古墳時代並行期の北方文化 東北地方の続縄文文化」『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』
- 工藤竹久 1999『東通村誌 - 遺跡発掘調査報告書編一』東通村教育委員会
- 工藤竹久 2001「第1章第5節「古墳時代と続縄文文化」」『東通村誌(歴史編Ⅰ)』東通村教育委員会
- 工藤哲司 2004『鴻ノ巣遺跡 第7次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集
- 熊谷公男 2004『蝦夷の地と古代国家』山川出版社
- 熊谷公男編 2015『蝦夷と城柵の時代』東北の古代史3 吉川弘文館
- 小谷地肇 2007『阿光坊古墳群発掘調査報告書』おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 佐久間正明 1996「坏形土器の共通性から見た「舞台式」と周辺土器群との関係」『法政考古学』第22集
- 佐藤則之 1992『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第5集
- 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団『清水内遺跡―6・8・9区調査報告』第1冊 郡山市教育委員会
- 鈴木信 2011「二 古墳時代並行期の北方文化 北海道の続縄文文化」『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』
- 鈴木琢也 2012「北海道における3～9世紀の土壌墓と末期古墳」『北方島文化研究』10号 北方島文化研究会編
- 高橋学ほか 1992「田久保下遺跡」『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第220集
- 高木晃ほか 2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集
- 高橋誠明 2014「古墳築造周縁域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』東北・関東前方後円墳研究会編
- 種市幸生ほか 1997『香深井5遺跡発掘調査報告書』北海道礼文町教育委員会
- 中村哲也ほか 2003『笹ノ沢(3)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第346集
- 藤沢敦編 2015『倭国の形成と東北』東北の古代史2 吉川弘文館
- 藤沢敦 2018「弥生時代後期から古墳時代の北海道・東北地方における考古学的文化の分布」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集
- 古川市 2006『古川市史 第6巻 資料Ⅰ 考古』
- 船場昌子ほか 2008『田向冷水遺跡Ⅲ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第118集
- 室野秀文ほか 1997『上田蝦夷森古墳群 太田蝦夷森古墳群発掘調査報告書』盛岡市教育委員会
- 山内幹夫ほか 1994「正直A遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告34』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 横須賀倫達 2009「後期型鉄冑の系統と系譜」『考古学ジャーナル』No.581 ニューサイエンス社
- 米田寛ほか 2009「新町遺跡」『平成20年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集